HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キケロの政治哲学とその認識論的基礎 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	安田, 将
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15064号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85451
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Masaru_Yasuda_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　安田　将

審査委員　主査　准教授　近藤　智彦
　　副査　准教授　村松　正隆
　　副査　教　授　砂田　徹
　　副査　准教授　稲村　一隆（早稲田大学政治経済学術院）

学位論文題名
キケロの政治哲学とその認識論的基礎

・当該研究領域における本論文の研究成果

キケロは、ラテン語の文体の点で後世の模範とされたものの、実際の政治活動においては日和見主義者であり、彼の哲学的著作もギリシア哲学をラテン語に移しただけの紹介にすぎない、とする見方が長く一般的であった。キケロの哲学に対する研究者の関心は近年高まりつつあるものの、国家やその指導者の理想を説く政治哲学上の立場と、アカデメイア派の懐疑主義を支持する認識論上の立場の関係については、これまで十分に説得的な見解は提示されてこなかった。こうした中で本論文が試みているのは、キケロの政治哲学が認識論によって実質的な仕方で基礎づけられていると解釈することを通して、キケロの哲学的立場の一貫した像を提示することである。本論文によると、キケロは知者が国家を支配すべきだとするプラトン的・ストア派的な理想を批判的に受容した上で、市民の自由な承認によって知恵のある有徳な者に権威がそなわり、その権威によって国家が指導されるという、自由と権威の相補的関係の上に成立する国家の理想を説いた。そのため国家の指導者に求められる知恵は、少数の知者のみが到達しうる絶対的に確実な真理の認識ではなく、雄弁による説得を通して人々の自由な判断を実現させるような本来的に公的性格をもつ知恵なのであり、まさにこのような知恵の構想を根拠づけているのが、キケロの支持するアカデメイア派の懐疑主義的な認識論だったのだとされる。以上の解釈を通して示されたキケロの一貫した哲学的立場は、新たに魅力的なキケロ像を浮かび上がらせる可能性をもつと同時に、知の公共性をはじめとする現代的な問題に対しても示唆を与えるものと言える。

本論文は、キケロの政治哲学と認識論に関する個別研究としても、従来の見解を刷新する解釈を打ち出している。キケロの政治哲学に関する本論文の解釈の特徴は、指導者の権威が人々の自由な承認に依拠するという考えを強調し、混合政体論を単なる権力の均衡ではなく市民全体の合意にもとづく協和を成立させる装置として捉える点にあるが、本論文はこの独自の解釈をキケロが批判的に受容したプラトンやストア派との対比を通して浮かび上がらせている。また、正しさ（法）の自然性が人々の主体的かつ共同的な判断と切り離せないとキケロは考えていたとする大胆な解釈については、これまで着目されてこなかった『法律について』の二つの議論の間の差異を比較することで論じている。こうした精密な解釈の方法によって、テクスト上は直ちに明確ではないキケロ自身の哲学的立場の独自性を、一定の根拠を示しつつ論じることに成功している。本論文はキケロの認識論についても、世界的な研究水準を踏まえて独自の解釈を提示した、日本では唯一と言ってよい成果を含んでいる。キケロが支持するアカデメイア派の立場をピュロン主義に近い「ラディカル」な懐疑主義とみなす近年の研究動向に抗して、本論文は、人間の理性能力の本質を人々の言語使用に根差す主体性と共同性に存するとみなす考えこそがキケロの認識論的立場の根本にあったことを鮮やかに示している。

審査の過程では、本論文の一部に説明の不十分な点や不明確な表現が見出されること、本論文で提示された大胆な解釈の一部については本論文中で取り上げられていないキケロの他の議論や歴史学的知見に照らしてその妥当性に疑問の余地が残ること、などの意見も出された。しかしこ

れらの点は、キケロにおける政治哲学と認識論の関係を示すという、解釈的にも哲学的にも困難な問題に果敢に挑戦して独自の解釈を提示した中ではやむを得ないものであり、すでに示した本論文の意義を損なうものではないと判断された。本論文に示された成果が今後、日本におけるキケロ研究の新たな水準を示すものとして、哲学・倫理学・政治思想史・西洋古典学など幅広い分野で参照されることは間違いない。本論文の第 1・2・3・5 章の基礎となる論文は、『西洋古典学研究』、『哲学』、『古代哲学研究（METHODOS）』、『倫理学年報』という、日本において当該分野を代表する学会誌に掲載済（もしくは掲載決定済）である。また、掲載論文にもとづき日本哲学会の若手研究者奨励賞、日本倫理学会の和辻賞（論文部門）を受賞し、さらに日本学術振興会の育志賞も受賞したことは、申請者の研究が学界においてすでに卓越した評価を得ていることを示している。

・学位授与に関する委員会の所見

以上を踏まえ、本審査委員会は本論文に示された申請者の研究成果を高く評価し、全員一致して学位申請者に博士（文学）の学位を授与することがふさわしいとの結論に達した。